HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大乳児縦断研究について
Author(s)	陳, 省仁
Citation	北海道大學教育學部紀要, 55, 101-105
Issue Date	1991-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29355
Type	departmental bulletin paper
File Information	55_P101-105.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大乳児縦断研究について

陳　　省仁

Personal Recollections and Opinion Concerning the "Hokudai Longitudinal Projects" on Infant Development

Shing-Jen Chen

はじめに

1980年から1990年までの約10年の間に，三宅和夫先生が研究代表者として，三つの研究を行った。これらの研究は，主として，生後3年までの乳幼児の社会・情動的発達に関する縦断的研究である。三つの研究は全てアメリカの研究者と何らかの関係を取りながら進められた。先生は既に退官されたが，二つの縦断研究の資料の一部を含むモノグラフとして近く世に問うという形でしか，これらの研究の決着がまだ付いていないにもかかわらず，更に，当事者の意図と反しながら，「北大縦断研究」は愛着研究として認知されている。

この10年間，北米心理学，なかんずく乳幼児に関する発達心理学に限って言えば，乳幼児の情動の発達，愛着関係の発達及び乳児に関する生物心理学の側面といったテーマが大きく取り上げられた時期でもあった。

この小文を書き，いままで関係者の既に発表した論文に触れられていない事項について述べるのは，一つは「北大縦断研究」の本来の狙いや着想を一当事者の「弁解」を記すためであり，もう一つは自他の今後の研究の反省材料としたいからである。以下はこの3つの縦断研究に参加した一個人の立場から，研究の背景や遂行の仕方及び資料収集の内容などを記述し，「発達心理学」のあり方についての基本的概念についての問題の「再提起」をしたい。

個人的背景

私は1978年広島大学大学院教育学研究科幼児学専攻の修士課程を終え，その秋に三宅先生の指導を求めて本学へ来た。北海道へ来る前までの約半年間，広島大学の幼児保健学教室の清水凡生，井上勝両先生のもとに，親子相互交渉についての読書会に参加した。自分のその後のテーマとして，読書会以外でも積極的に読み進めたため，広島を離れたときに，ある論文集の三分の二位読み進んでいた（M. A. Hofer（Ed.），Parent-infant relationship, 1975）。北海道へ来てから，暫く研究室の今までの研究発表や論文について勉強したが，自分はその時既にこれらの研究が扱った幼児期についてより，乳児期のことに強い興味を感じていた。特に子どもの「個性」の発達を，出生直後から研究したい気持ちが強かった。これは，上に触れた読書会で読んだ論文や同時に読んだトマス，チェスら（Thomas, Chess, et al,, 1963），エスカローナ（Escalona, 1968）などが多分影響した関係すると思われる。特に，ベルら（Bell, et al., 1971, 1975）の新生児期の気質特徴と3歳時の気質特徴との関連についての研究は後の縦断研究の参考になった。

1980年7月に始まった最初の縦断研究であるコホート1とそれに続くコホート2，3も基本的に乳児の気質的特徴がどのような発達的変化が見られるかの記述を目指した研究であった。自分

としては，上に触れたいくつかの研究に示されている考え方やこれらによって提示されている観察・測定項目を参考にして先ず乳児期の気質特徴についての「ethogram」を作成するのは第一歩と決めたのであった。理論的な考慮もこれらの研究の中のものを超えなかった。この点に関して，10年経った今でも理論らしいものが依然欠けていると思う。この分野における理論の欠如は，他のいくつかの分野と同様に，「発達の現象」もしくは「発達の事実」についての認識の遅れの反映であると思われる。理論はいくつかの「現象」や「事実」の基に考案される，ある「現象」や「事実」間の関係を説明するものであり，また，このように考案された理論によって更に多くの事実や新しい理論を導き出すのである。もちろん，現象や事実は「客観的に外界に転がっている」わけでもなく，なんらかの作業仮説に基づいた観察や測定の結果である。コホート1が始めた時，このような「作業仮説」は，非常におおざっぱに言えば，例えば，精神分析理論に触発された「反動形成」や「連続説」等しかなかった。このことは今でもそう変わっていない。

そもそも乳幼児の気質についての興味は，いわゆる気質という概念が観察できる乳幼児の行動やパーソナリティ発達の諸側面にどう適用するか，また，行動やパーソナリティの発達を通して，どんな発達的過程があるのか，更に，気質的特徴は乳幼児の行動・精神発達にどんな影響を及ぼすか等の問題の解明にある。しかし，たとえ気質要因重視の極端な立場を取っても，発達の全てがそれによって説明ができないことは明白である。残りの道は，他の要因との相互交渉によって発達を説明することである。このことは，発達を多因子多面による複雑な現象として捉える場合の当然の帰結である。

三つの乳幼児期についての縦断研究

コホート1は研究室にとって初めて乳児を扱う縦断研究であり，研究室の他の研究を区別するため「乳児研」と呼ばれた。これは単なる便宜であるが，乳児のなにについてかの言及のないことはこの一連の研究の性格の象徴でもあるように思う。後に学会や他の研究グループによって「気質研究」あるいは「愛着研究」と呼ばれたことに抵抗を感じたのは自分だけではなかった。三宅先生は最近の著書の中でいくつかの乳児を扱う研究の現状について，それぞれの欠点を指摘している（三宅，1990）。研究責任者（principal investigator）が一連の「乳児研」において目指している理想は，単に乳児の気質もしくは愛着関係ではなく，むしろ乳児についてのより全面的な理解であろう。以下は生後12カ月までのデータの収集について述べる。

1980年5月末コホート1のデータ収集が始まった。8月末までの3カ月間に，妊娠後期に入った初産予定の妊婦30人について，産前面接を二回行い，妊娠に対する本人や夫の反応，お産に対する期待，子どもに対する期待や育児の方針などについて質問した。このような母親面接は出産直後，産後1カ月，3カ月及び7カ月時にも行った。新生児に対して，吸啜中断反応（RIS）2回，授乳場面の母子相互交渉1回の観察が行われ，VTRによって記録した。

生後1カ月と3カ月時に，90分間の乳児に関する自然観察を行い，VTRによって記録した。7カ月時に，実験室場面及び家庭における観察を行い，前者は母子の自由遊び，認知課題および見知らぬ人に対する反応や母子分離の反応が観察され，後者に関しては母子間の相互交渉，実験者による模倣課題における負的情動反応（distress to the model）などの観察がなされた。

生後11カ月時に，もう一度母子間の自由遊び，一人遊び及び社会的参照行動（social referencing）の実験室場面観察を行った。

満1歳頃，Ainswaorth Strange Situation，認知課題場面，及び新奇場面（不意にロボットが発

声しランプが点滅する等）における反応の観察がなされた。1歳以後3歳半までの間に，数カ月間隔で家庭訪問や実験室場面において，母子間の相互交渉（服従）や同年齢の他者との遊び，相互交渉の様子が観察された。これらの観察あるいは母親に対する面接の実施月齢は，コホート1と2の間では多少のずれがあるが，大概似ている。コホート3においてはいくつかの違いが見られ，特に，前2者において重視されてこなかった母親の要因の補強および母子間情動のコミュニケーション過程への重視が特徴的であった。ちなみに，コホート2の母親に対する産前面接は1982年1月から，コホート3の新生児期観察・測定は1986年3月からそれぞれ始めたのである。コホート3について産前の面接は行わなかった。

以上は3つのコホート，そして，対象児生後12カ月までのデータ収集の概略である。しかし，研究の完成には更にデータの分析，討論及びこの一連の過程について文章を用いて，論文として報告する必要がある。現在，この3つのコホートについて，部分的なデータの分析の報告や共同執筆のモノグラフという形の単行本はあるが，完成した研究とは言えないし，当事者達も，そのままで終了させる考えではない。ここに問題になっているのは，これらの研究は，研究者達の予想を裏切って，「愛着研究」として認識されることである。この事態は，いくつかの要因が関わっている。もっとも決定的なのは教育学部附属乳幼児発達臨床センター英文年報（以下英文年報と略す）への共同執筆論文の寄稿である。

研究のなりゆきと転機

コホート1とコホート2が現在のところ，「愛着研究」として位置づけられていると言うのは1つの現実である。上にも触れたが，個人の記憶ではそうなるはずではなかった。しかしながら，最近このことについて調べたところ，どうも自分の記憶が間違っているようである。1981年3月に出版された英文年報の巻頭に，三宅先生による乳幼児発達臨床センターの研究近況という文章で，コホート1になる研究についての紹介があった。この報告において，4つの研究について述べている。これによると，4番目の研究プロジェクトが「発達初期における愛着の発達と社会化についての共同研究」（A collaborative study on the growth of attachment and socialization in early years）と呼ばれ，研究目的を「生後2年間の母親行動，乳児の気質のいくつかの側面，及び愛着の指標（複数）との間の関係を研究するものである」としてある（Miyake, 1981, pp. 4–5）。この報告が書かれた時期（1980−1981）を考えると，コホート1の始まるときにすでにこのような考えがあったことが明かである。「愛着研究」として認知されて，位置づけされている「現実」とのズレがあるのは筆者個人だけではないことが，まもなく出版する共同執筆によるモノグラフの巻末の座談会における記録でも確認できる（三宅編著，1991）。問題は上に掲げた研究目的がどう理解され，実際のデータ収集及び後のデータ分析にどのように実現されるかである。

乳児初期の気質的特徴の「ethogram」を目指す中で，乳児にとって最も重要な他者である母親を無視しては実際の観察や測定は不可能であるし，そのようなやりかたは，言い換えれば，乳児の気質は母親との関係を切り離されては捉えられないものである。更に，コホート1を始める前に，それまで三宅先生や研究グループによる日米比較縦断研究などを通して，母子関係の子どもの人格形成に与える影響の重要性が認識された（例えば，Miyake, et al, 1978）。特に縦断的に，より自然な状態での母子相互交渉の観察を通して研究をしたいという気持ちが研究責任者三宅先生に生じたと考える。一方，トマス，チェスらのニューヨーク縦断研究やKaganが1970年代後半頃から研究し始めた気質的特徴の連続性についての研究などに影響を受けて，子どもの個性に

ついての関心をも持つようになった（三宅・陳，1981）。

しかしながら，コホート1，とコホート2が「愛着研究」に傾いた契機は上に触れた共同執筆であるように思う。執筆は1982年から1983年の間，つまり，コホート1の対象児たちの月齢が27，8カ月，コホート2の対象児の月齢が4，5カ月頃，コホート1についての最初報告をまとめる時であった。最初にいくつかの問題が浮上した。自分のことに関して言えば，かつて考えていた乳児初期の気質特徴についての「ethogram」は，観察や測定の間隔が長いため，行動の変容の連続性の確保に問題が生じ，自他とも納得するような分析方法も見つからぬ等の難題に直面し，更に，データの分析は研究に参加する数人に分かれ，統合する分析の視点がなかなか見いだせなかった。この局面を打開するために，「取りあえず」既に分析された12カ月時のStrange Situation場面の結果を中心として検討してみるという案が出され合意された。その結果は，1981－1982の英文年報の論文である（Miyake, Chen, Ujiie, Tajima, Satoh, & Takahashi, 1983）。これは更に後のSRCDモノグラフの論文（Miyake, Chen, & Campos, 1985）になり，よく広く知られるようになった。

この契機により，コホート1と2に関する今まで発表された論文，報告及び単行本は，ほとんど全てなんらかの形で，12カ月時のAinsworth Strange Situation手続きによる愛着関係分類に基づいた考察となった。この事態が決して望ましくないことは，いろんな会合で研究の関係者の一致した意見であるが，より満足できる代案を打ち出すことは今だに出来ないでいる。望ましくないと言うのは，愛着関係の分類を中心とした今までのいくつかの考察の中で，愛着分類を絶対的指標あるいは変数として扱ってしまう傾向があるし，愛着関係の形成の過程に関しての考察がなされない結果になることである。これを打開するには難しいが，私見ではあるが，まず従属変数あるいは後続変数としての愛着関係分類の扱い方から脱出し，他の変数を新たに捜し出すことである。愛着分類という概念以外の新しい概念・理論的枠組みを検討し，全ての収集した資料を点検し再（補充）分析を行う道しかないと思う。

残された課題

以上のような経験から自分としてどのようなことを理解したか，発達研究の課題として，残された課題をどのように受け止めているかを次の4点にまとめ今後の参考にしたい。

1．研究の目的を明白にし，それに沿って資料の収集を計画し実行する。このことは一見簡単であるが，3つのコホートの研究において，実践されたとはいえないのである。確かに，この一連の資料収集で集めた資料の量は膨大であるが，限られている人員でひたすら資料収集に励み，せっかくのコホート2やコホート3も，最初のコホートにおける問題点や短所を充分に検討し教訓を受けるチャンスを見逃してしまう結果となった。これは自分の研究者としての準備の不十分さに問題があるが，研究を通してしか研究者が成長する道がないことも忘れてはならぬことである。言い換えれば，充分な予備（パイロット）が研究を円滑に推進する先決条件である。

2．発達心理学の教科書や参考書において，縦断的方法は横断的方法と対比され，単なる諸研究方法の一つとして紹介されることが多い。しかし，見逃しがちなことは，縦断的研究は実際のところ，複数の測定や指標を用い，従ってさまざまな技法・技術を要するのである。これらの技法・技術の習得が縦断研究を成功させる鍵であることは言うまでもない。

3．それぞれの研究はさまざまな目的に従って進められるが，発達心理学研究として，共通の

目標の一つは行動の変化の過程の理解のはずである。研究の対象にもよるが，行動の変化を捉えるためには，一定な観察間隔あるいは観察頻度が重要である。行動の変化過程の理解を目的とする研究には，観察の対象の数より，往々にして少数ではあるが綿密な観察のもたらす知見の方が大であることもある。

4．発達心理学研究は，従来の主流心理学に従って，変数間の因果関係の解明を目的としてきた。しかし，生活体の発達は多次元，多過程による複雑な現象であり，果して従来の変数制御による因果関係で捉えられるものであるかは再考する必要のある問題である。変数の制御による研究法を有効に進めるために，多次元・多過程の相互交渉の様相についての詳細な記述が先に，あるいは少なくとも同時に行うべきであろう。このように考えるとき，3つのコホートの研究の再分析，再建及びまとめには，当面の課題として，より記述的方向への道も残されていることに研究の関係者が気付くであろう。

文　　献

Bell, R. Q., Weller, G. M., & Waldrop, M. F. 1971 Newborn and preschooler : Organization of behavior and relations between periods. Monographs of the Society for Research in Child Development, 36 (Nos. 1, 2, Serial No. 142).

三宅和夫・陳　省仁　1981　乳幼児発達研究の新しい動向(1)(2)――個体と環境の関係のとらえ方――児童心理　425（pp. 158－177），426（166－184）.

Escsalona, S. K. 1968 The roots of individuality : Normal patterns of development in infancy. London : Tavistock.

三宅和夫編著　乳幼児の人格形成と母子関係　東京大学出版会（1991年2月出版予定）

Miyake, K. 1981 1981 Summary of the current Research activities of RCCCD. Annual Report 1977–1980, R.C.C.C.D., Faculty of Education, Hokkaido University

三宅和夫　1990　子どもの個性：生後2年間を中心に　東京大学出版会

Miyake, K., Chen, S.J., Ujiie, T., Tajima, N., Satoh, K., & Takahashi, K. 1983 Infant's temperamental disposition, mother's mode of interaction, quality of attachmen, and infant's receptivity to socialization : Interim progress report. Annual Report 1981–1982, R.C.C.C.D., Faculty of Education, Hokkaido University. pp. 25–49.

Miyake, K., Chen, S.-J., & Campos, J. J. 1985 Infant temperament, mother's mode of interaction, and attachment in Japan : An Interim report. In Enge Bretherton & Everett Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research. Monographs of the Society for Research in Child Development, 50 (Nos. 1–2, Serial No. 209).